

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			キリスト教学 研究科	キリスト教学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	キリスト教学研究科 後期博士課程 1年		國友 淑弘 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	キリスト教学研究科		佐藤 研 教授 印		
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	ゴスペルの由来・本質・機能 —その歴史的誕生の経緯と現代における役割について—				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	キリスト教学研究科 後期博士課程 1年		國友 淑弘		
研究期間	2013 年度				
研究経費	(支出金額) 200 千円 / (採択金額) 200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

スピリチュアル(霊歌)は西アフリカ及び西インド諸島においてその前形態が確認できる(申請者の修士論文参照)。その際アフリカ系アメリカ人音楽の特徴として考察された「音楽発生の場と出来事が一元化(unified)する、優れてアフリカ的性格(characteristically African)」について、それが構成される音楽リズム要素の考察を行うと共に、1900年代以降の「ゴスペル」の形成と展開においてどのような役割を持ったかを探り、合わせて「ゴスペル」音楽の本質とその現代における意義を探求する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[アフリカン・リズム] [スピリチュアル(黒人霊歌)] [アフリカ系アメリカ人]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究概要を基に、1900年代におけるゴスペル形成初期と、現代のゴスペルをリンクするものとは何かを探るため、アフリカ系アメリカ人とその文化を理解する上で欠かせない、現在に残された黒人霊歌に関する貴重文献の分析を行った。研究分析から、分野を音楽的要素に絞り、黒人霊歌からゴスペルにリンクしていく過程において重要と思われるリズム考察を行った。

アフリカ系アメリカ人のリズムは、その発端となる西アフリカの音楽リズムがルーツとなる。その最も基本的なリズムを構成しているのが、クロス・リズムであった。そこでアフリカン・リズムの先行研究者であるクワベナ・ンケティア (Joseph Hanson Kwabena Nketia)、ガンサー・シューラー (Gunther Schuller)、ピーター・ファン＝デル＝マーヴェ (Peter van der Merwe) のリズム研究を基にその類似と相違の確認作業を行った。

① 先行研究から示される「ヘミオラ」、「ポリリズム」、「クロス・リズム」の3種類のリズムについて

ファン＝デル＝マーヴェは、そのクロス・リズムの分析を12パルスと8パルスの関係から考察する。12パルス分割は3+3+3+3か4+4+4にする一方、8パルスは3+5または5+3に、12パルスを5+7または7+5といった不均等な分割を行うことがあるとして、ビートを互いにずらして出来上がることを説明する。ファン＝デル＝マーヴェの考察は単純な2パルス4分音符と1パルス8分音符の組み合わせを、先にスウィングさせることによって、3パルス付点4分音符と4分音符と8分音符の組み合わせとして、その垂直な重なりからクロス・リズムの考察を可能としていた。この斬新な方法は興味深いものであった。

しかしながら、8パルスと12パルスの最少パルスは、2パルスと3パルスであるため、最小パルスからの考察を行うことも出来る。ンケティアはその最少パルス2拍パルスと3拍パルスを始めから分けてヘミオラを切り口に考察する。その上で、時間幅に等分化された分割的 (divisive) リズムと、音のグループの長さが時間幅を規則的に分割した音価を超えて伸縮する付加的 (additive) リズムの2種類が存在するとしている。この分割的リズムと付加的リズムが垂直に並べられた際に生じるのがクロス・リズムであるとしている。

シューラーは、A・M・ジョーンズの考察を基にアフリカン・リズムを3点に要約しており、その中のリズムについて分割的原理というよりはむしろ加算的原理に立脚すると論じているが、詳細な分析を行うとンケティアの分割的リズムと付加的リズムが垂直に並べられた際に生じるクロス・リズムと同じものを示していることが検証できた。

更にンケティアは、クロス・リズムに対し、メトロノーム的時間幅に演奏される楽器間の落しによるリズム特徴をマルチリニア・リズムの存在として明らかにしており、段階的配置 (grading) と空間的配置 (spacing) の2種類によって構成されるとしている。このリズム効果がポリリズムの相互作用 (interplay of polyrhythms) を生じさせている。したがって、アフリカン・リズムはクロス・リズムとポリリズムによって構成されていることが明らかになった。

上記の考察からアフリカン・リズムには、2拍パルスと3拍パルスが水平的に並べられた「ヘミオラ」、ある一定の箇所では拍が一致する「ポリリズム」、そして拍が全く合わない「クロス・リズム」の3種類の要素が存在することが確認出来た。

② 3種類のリズム「ヘミオラ」、「ポリリズム」、「クロス・リズム」の西洋音楽における存在について

次に「ヘミオラ」、「ポリリズム」、「クロス・リズム」の3種類のリズムが西洋音楽に存在するかについて検証を行った結果、「ヘミオラ」は、ダンスタブルの「来てください、聖霊よ、来てください、創り主なる聖霊よ (Veni Sancte Spiritus, Veni Creator Spiritus)」の曲中に、「ポリリズム」は、ショパンの幻想即興曲、ホルストの『惑星』第4「木星」、マーラーの交響曲第1番の曲中において確認出来た。また「クロス・リズム」はリズムの異なる旋律を合成した場合に聞こえる不均等な加減の箇所と考えれば、ポリリズムの只中にクロス・リズムの存在が確認出来た。

これらを更に裏付ける記譜上の問題点があった。ファン＝デル＝マーヴェは、クロス・リズムがごく普通に音楽の基本構造の一部になっていた時代のヨーロッパ音楽では、オン・ビートのフレーズとまったく同じように、頻りにアフリカ方式のクロス・リズムが演奏されており、その名残がJ・S・バッハの時代になるまで残っていることを指摘している。クオドリベット旋律がその存在を示していると考えられる。従って、「ヘミオラ」、「ポリリズム」、「クロス・リズム」の3種類は西洋音楽にも存在が確認出来た。

③ アフリカのリズムとヨーロッパのリズムの相違について

ではアフリカのリズムとヨーロッパのリズムの相違は一体どこにあるのか。検証を行った結果、結論としてアフリカン・リズムの特徴は一定の型を組み合わせるのではなく、不規則なリズム変化を続けることを基本としている。西洋音楽はあくまでも一定枠が存在しており、その枠内においてのみ様々なリズムが存在する。したがって一部を切り取れば同じであっても、演奏継続状態において一定枠が存在するのか、不規則性を常に求め変化するのかという点が明らかな相違であると結論付けた。この西洋に存在しない、独特なアフリカン・リズムこそが、西アフリカ及び

研究成果の概要 つづき

西インド諸島においてスピリチュアル（霊歌）の前形態として確認できる最も純粋な音楽要素であり、一元化をもたらすアフリカの性格（Characteristically African）の重要な一部であると結論づけた。

④ アフリカン・リズムのシンギング・スタイルにおける発現

ではこのアフリカの性格（Characteristically African）の重要な音楽要素であるアフリカン・リズムは 1900 年代以降の「ゴスペル」の形成と展開においてどのような役割を持ったかについて、彼らのシンギング・スタイルに発現されていることの確認を行った。

南北戦争以降、黒人教会の音楽は明らかにペンテコステ派とバプテスト派の音楽に分類される。前者が早くから礼拝にリズム楽器を用い、後者は純粋な神への応答として一切の楽器使用を禁じている。アフリカの性格（Characteristically African）の重要な音楽要素であるアフリカン・リズムは、それぞれの状況下において用途が変化している。ペンテコステ派はよりリズムを強固的なものとして憑依恍惚状態のツールとして用いられていた。それに対し、バプテスト派は楽器を禁じられた無伴奏の演奏下において、カルテットを生み出していると結論付けた。またアフリカン・リズムの純度を、繊細かつ巧みに練り上げていることが、Golden Gate Quartet のヴォイスパーカッション構成から確認することが出来た。

従って、アフリカン・リズム要素は、1900 年代以降の彼らの音楽において、明らかに進化を伴い発現されていると考察した。

今回の研究計画概要で示した 1900 年代以降の「ゴスペル」の形成と展開においてどのような役割を持ったかについては、まだ今回の考察以外にもいくつかの音楽要素が存在するため完全とは思われない。合わせて「ゴスペル」音楽の本質とその現代における意義を探求するまでには至らなかった。しかしながら、その一端が不規則性を常に求め変化するリズムにあることは確認できる大きな成果であった。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

・研究成果の一部を2013年12月に立命館大学文学部「英語圏研究概論」特別授業にて講義を行った。

・研究成果の一部を2014年1月に本校文学部キリスト教学講義「アフロ・アメリカン宗教音楽」(スコット・ショウ教授担当)にてゲスト・スピーカーとして講義を行った。

・研究成果の一部を2014年1月に桜美林大学芸術文化学群音楽専修の授業にて講義を行った。

・研究成果の一部を「アフリカン・アメリカン・ミュージック シンギング・スタイルー宗教音楽における歌のスタイルとその変遷ー」として纏め、2014年1月にキリスト教学研究科共同演習にて発表を行った。

・研究成果の一部を『北米アメリカに継承されたアフリカン・リズムの特徴と遺産』として論文にまとめた。現在、投稿先に申請を行っている。